

資治通鑑 第 221 卷

【唐紀三十七】 起屠維大淵獻，盡上章困敦，凡二年。

■唐、続国訳漢文大成 経子史部 第 12 卷 320p

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝下之上乾元二年（己亥，759年）

【史思明は安慶緒を殺す】

■[史思明は大聖燕王と称す]春，正月，己巳(5)朔，史思明は壇を魏州の城北に築き，自ら大聖燕王と稱す。周摯^{しゅうし}を以て行軍司馬と為す。李光弼は曰く、

「思明は魏州を得而して兵を按じて進まず，此れ我をして懈惰せ使め，而して精銳を以て吾が不備を掩わんと欲する也。請う朔方軍と同じく魏城に逼り，之と與に戦かわんことを求めん。彼は嘉山之敗^(218 卷至徳元載にあり、続の 280 卷というのは誤り)に懲り，必ず敢えて軽々しく出でず。日を曠^{むな}しくして久しきを引くを得れば，則ち鄴城は必ず拔かん矣。慶緒已に死すれば，彼は則ち辭の以て其の衆を用いる無からん也。」
魚朝恩は以て不可と為し，乃ち止む。(胡三省曰く、光弼の計を用いしめば安くぞ溢水の潰有らんやと)

■戊寅(14)，上は九宮貴神(太一・摂提・權主・招搖・天符・青龍・咸池・太陰・天一。其の説は黄帝九宮經・蕭吉の五行大義に本づく)を祀る，王璵之言を用いる也。乙卯(51、巳卯に作るべし 15)，藉田を耕す。(12-321p)

■[李嗣業の戦死]鎮西節度使の李嗣業は鄴城を攻め，流矢の中たる所と為り，丙申(32)，薨ず。兵馬使(馬使×)の荔非元禮^{れいひ}は代わりて其の衆に將たり。初め，嗣業は段秀實を表して懷州長史と為し，留後の事を知たらしめ，時に諸軍は戍に屯すること日久しく，財は竭れ糧は盡き，秀實は獨り芻粟を運び，兵を募り馬を市い以て鎮西行營に奉じ，道に相い繼ぐ。

■[張后は政事に干豫]二月，壬子(48)，月食し，既く。(春秋の法に日食を書し、月食を書せず。日は君の象なり。此れ張后の専横に因りて月食を書す。記に曰く、男教収まらず、陽事得ざれば謫は天に見われ、日之が為に食す。婦順収まらず、陰事得ざれば謫は天に見われ、月之が為に食す。是故に日食すれば、天使素服して六官の職を収め、天下の陰事を蕩す。天子と后とは猶ほ日と月と、陰と陽とのむごとく、相い須ちて成る者なりと)是より先百官は皇后に尊號を加えんと請いて曰く「輔聖」と、上は中書舍人の李揆に問い，對えて曰く、

「古より皇后は尊號無し，惟だ韋后(208 卷中宗景龍元年にあり)は之れ有り，豈に法と為すに足るや！」

上は驚いて曰く、

「庸人は幾んど我を誤まらさんとす！」

會々月食し，事は遂に寢ねる。后は李輔國と相い表裡し，禁中に横(横暴)にして，政事に干豫し，請托窮まり無し。上は頗る悦ばず，而して之を如何ともする無し。

■[郭子儀等の九節度使は鄴城を圍む]郭子儀等の九節度使は鄴城を圍み，壘を築くこと再び重く，塹を穿つこと三重，漳水を壅ぎて之を灌ぐ。城中の井泉は皆な溢れ，棧を構え而して居り，冬より春に涉り，安慶緒は堅く守りて以て史思明を待ち，食は盡き，一鼠は錢四千に直り，牆(続は牆[麥弋]、先に麥[麥弋]を以て土に雜えて牆を築く。今圍は急にして芻乏し、故に[麥弋]を洵げて馬を飼う)及び馬矢を洵^{やしな}げて以て馬を食う。人は皆な以為えらく克たんこと朝夕に在り，而るに諸軍は既に統帥無く，進退は稟(令を稟けるなり。行軍の進退は、必ず令を主帥に稟く。今諸軍は令を稟ける所無し)ける所無し。城中の人の降らんと欲する者は，水の深きに礙^{さまた}げられて，出づるを得ず。城は久しく下らず，上下は解體す。(師老い勢い屈したるが故の解体す)

■[史思明は鄴を救援、決戦へ]思明は乃ち魏州より兵を引いて鄴に趣き(果たして李光弼の言の如し)，諸將をし

て城を去りて各々五十里にして營を為ら使む、營毎に鼓三百面を撃ち、遙に之を脅かす。又た營毎に精騎五百を選び、日々に城下に於いて抄掠し、官軍は出ずれば、即ち散じて其の營に歸る。諸軍の人馬牛車は日々に失う所有り、樵采甚だ艱く、晝之を備えれば則ち夜至り、夜之を備えれば則ち晝至る。時に天下は饑饉し、轉餉する者は南に江、淮より、西は並、汾より、舟車は相い繼ぐ。思明は多く壯士を遣わして官軍の裝號を竊み、運者を督趣し、其の稽緩を責め、妄りに人を殺戮せしむ、運者は駭き懼る。舟車の聚まる所は、則ち密に火を縦ちて之を焚く。往復聚散は、自ら相い辨識し、而るに官軍の邏捕は察する能わざる也。是に由り諸軍は食乏しく、人は自ら潰えんと思う。思明は乃ち大軍を引いて直ちに城下に抵り、官軍は之と日を刻して決戦す。

■[突風で全軍壊乱して、東京放棄]三月、壬申、官軍の歩騎六十萬は安陽河(滏水は安陽県を経て東流す、之を安陽河と謂う)の北に陳し、思明は自ら精兵五萬を將いて之に敵し、諸軍は之を望み、以て遊軍と為し、未だ意を介せず。思明は直前に奮撃し、李光弼、王思禮、許叔冀、魯炆は先ず之と戦い、殺傷は相い半ばなり。魯炆は流矢に中たる。郭子儀は其の後を承け、(12-322p)未だ陳に布くに及ばず、大風は忽ち起こり、沙を吹き木を抜き、天地は晝晦く、咫尺相い辨ぜず。兩軍は大いに驚き、官軍は潰え而して南し、賊は潰え而して北し、甲仗輜重を棄て積を路に委てる。子儀は朔方軍を以て河陽の橋を斷ちて東京を保つ。戦馬萬匹、惟だ三千は存するも、甲仗十萬、遺棄して殆んど盡く。東京の士民は驚駭し、山谷に散奔し、留守の崔圓、河南尹の蘇震等の官吏は南に襄、鄧(二州は山南東道に属す)に奔り、諸節度は各々潰えて本鎮に歸る。士卒の過ぎる所は剽掠し、吏は止める能わず、旬日にして方に定まる。惟だ李光弼、王思禮は部伍を整勅して、軍を全くして以て歸る。

■[子儀は河陽を守る]子儀は河陽(河南省河北道孟県、現・焦作市孟州市)に至り、將に城守せんと謀らんとす。師人は相い驚き、又た缺門(水經注に曰く、穀水は弘農池陽縣の南に出で又、東して新安縣の故城の南を經、又東して千秋亭の南を經、又東して缺門山を經る。山阜の接せざる者里余、故に是名を得たりと)に奔る。諸將は繼いで至り、衆は數萬に及び、東京を捐て、退きて蒲、陝を保つを議す。都虞候の張用濟は曰く、

「蒲、陝は荐りに饑え、河陽を守るに如かず、賊は至れば、力を並せて之を拒がんには。」
子儀は之に従う。都游奕使の靈武の韓游瓌をして五百騎を將い前みて河陽に趣か使む、用濟は歩卒五千を以て之に繼ぐ。周摯は兵を引いて河陽を争い、後れて至り、入るを得ず而して去る。用濟は所部の兵を役して南、北兩城を築き而して之を守る。段秀實は將士妻子及び公私の輜重を帥いて野戍(野水渡、戍を置きて之を守る、因りて野戍と謂う)より河を渡り、命を河清(本は河南の尹に属す。本は大基線。河南省河北道孟縣の西南五十里、現・焦作市孟州市)之南岸に待つ、荔非元禮は至り而して焉に軍す。諸將は各々上表して罪を請い、上は皆な問わず、惟だ崔圓の階封を削り(先に趙国公に封じられ、実封五百戸。国公は従一品の階、開府儀同三司に比す)、蘇震を貶して濟王府の長史と為し、銀青階を削る。

■[史思明は安慶緒を殺して軍を併合]史思明は審かに官軍の潰え去るを知り、沙河(鄴城の西北二百里に在り、直隸省大名道沙河縣、現・邢台市沙河市)より士衆を收め整え、還りて鄴の城南に屯す。安慶緒は子儀等の營中の糧を収めて、六七萬石を得、孫孝哲、崔乾祐と謀り門を閉じて更に思明を拒ぐ。諸將は曰く、

「今日豈に復た史王に背く可けん乎！」
思明は慶緒と相い聞せず、又た南に官軍を追わず、但だ日々軍中に於いて士を饗す。張通儒、高尚等は慶緒に言つて曰く、

「史王は遠く來たる、臣等は皆な應に迎え謝すべし。」
慶緒は曰く、

「公が暫く往くに任す。」

思明は之を見て涕泣し、厚く禮し而して之に歸す。三日を經、慶緒は至らず。思明は密に安太清を召して之を誘わ令め、慶緒は窘蹙し、為す所を知らず、乃ち太清を遣わして上表して臣を思明に稱し、云う

「請う甲を解きて入城せん、璽綬を奉上せん。」

思明は表を省して、曰く、

「何ぞ此くの如きに至るや！」

因りて表を出し(史思明が慶緒の表を出し、遍く將士に示すは、以て其の情の向背を觀んとするなり)遍く將士に示し、威な萬歳を稱す。乃ち手疏して慶緒を唁(弔、生きる者を弔う)い而して臣を稱せず、且つ曰う、

「願わくは兄弟之國と為り、更に籓籬之援けと作らん。鼎足し而して立つは、猶ほ或は庶幾わん。北面之禮は、固より敢えて受けず。」

並せて表を封じて之を還す。慶緒は大いに悦び、因りて血を敵りて同盟せんと請う、思明は之を許す。慶緒は三百騎を以て思明の營に詣り、(12-323p)思明は軍士をして甲を擯し兵を執りて以て之を待た令む、慶緒及び諸弟を引いて入りて庭下に至る。慶緒は再拜し稽首して曰く、

「臣は荷負する克あたわず、兩都を棄失し、久しく重圍に陥つ、意わざりき大王は太上皇(安祿山のこと、219卷にあり)之故を以て、遠く救援を垂れ、臣をして應に死すべくして復た生か使めんとは、頂を摩して踵に至るも、以て德に報いる無し。」

思明は忽ち震怒して曰く、

「兩都を棄失するは、亦た何ぞ言うに足りん。爾は人の子と為り、父を殺して其の位を奪う、天地の容れざる所なり！吾は太上皇の為に賊を討つ、豈に爾の佞媚を受けん乎！」

即ち左右に命じて牽き出し、其の四弟及び高尚、孫孝哲、崔乾祐と並んで皆な之を殺す。張通儒、李庭望等は悉く授けるに官を以てす。思明は兵を勒して鄴城に入り、其の士馬を収め、府庫を以て將士に賞し、慶緒の先に有つ所の州、縣及び兵は皆な思明に歸す。安太清を遣わして兵五千を將いて懷州を取り、因りて留まりて之を鎮せしむ。思明は遂に西略せんと欲するも、根本未だ固まらざるを慮り、乃ち其の子の朝義を留めて相州を守らしめ、兵を引いて范陽に還る。

【唐の体制立て直し】

■**回紇**甲申(20)、回紇の骨啜特勒、帝德等十五人は相州より奔りて西京に還り、上は之を紫宸殿に宴し、賞賜に差有り。庚寅(25)、骨啜特勒等は辭して行營に還る。

■辛卯(27)、荔非元禮を以て懷州刺史と為し、鎮西、北庭行營節度使を權知せしむ。元禮は復た段秀實を以て節度判官と為す。

■**新政治体制構築**甲午(30)、兵部侍郎の呂諲(りょいん)を以て同平章事とし、乙未(31)、中書侍郎、同平章事の苗晉卿を以て太子の太傅と為し、王琬を刑部尚書と為し、皆な政事を罷める。京兆尹の李峴を以て吏部尚書を行わしめ、中書舍人兼禮部侍郎の李揆を中書侍郎と為し、及び戸部侍郎の第五琦を並びて同平章事とす。上は峴に於いて恩意は尤も厚く、峴も亦た經濟を以て己が任と為し、軍國の大事は多く獨り峴に決す。是に於いて京師は盜多く、李輔國は羽林の騎士五百を選んで以て巡邏に備えんと請う(金吾の職を奪わんとす)。李揆は上疏して曰く、

「昔西漢は南北軍を以て相い制し、故に周勃(劉氏を安んずること漢の高祖紀にあり)は南軍に因りて北軍に入り、遂に劉氏を安んず。皇朝は南(金吾衛は屬す)、北牙(羽林衛は屬す)を置き、文武區分し、以て相い伺察す。今羽

林を以て金吾に代わりて夜を警めしめば、忽ち非常之變有れば、將に何を以てか之を制せん！」
乃ち止む。

■ **[郭子儀を元帥]** 丙申(32)，郭子儀を以て東畿(東京の畿内)、山東、河東諸道元帥と為し、東京留守を權知せしむ。河西節度使の來瑱(河西に移り、未だ行かざるに相州の師は潰え、因りて之をして陝に鎮して關を守らしむ。つぎ手で襄陽に徙される)を以て陝州刺史を行わしめ、陝、虢、華州節度使に充てる。(12-324p)

■ **[王思禮は潞城にて勝利]** 夏，四月，庚子(36)，澤潞節度使の王思禮は史思明の將の楊旻を潞城(潞州に属す、隋の開皇十六年に於く。山西省冀寧道潞城県、現・長治市潞城区)の東に破る。

■ **[李輔國の専制]** 太子の詹事の李輔國は、上が靈武に在るより、元帥行軍司馬の事を判じ、帷幄に侍直し、詔命を宣傳し、四方の文奏、寶印符契、晨夕の軍號は、一に以て之を委ね、京師に還るに及び、専ら禁兵を掌り、常に内宅(禁中にあり)に居り、制敕は必ず輔國の押署を經、然る後に施行し、宰相百司は非時に事を奏するは、皆な輔國に因り關白し、旨を承ける。常に銀台門(左銀台門は紫宸殿の東、右銀台門は西)に於いて天下の事を決し、事は大小と無く、輔國は口ずから制敕を為り、寫して外に付して施行し、事畢りて聞奏す。又た察事數十人を置き、潜に人間に於いて細事を聽察せ令め、即ち推按を行う。追索する所有れば、諸司は敢えて拒む者無し。御史台、大理寺の重囚は、或は推斷すること未だ畢らざるに、輔國は追いて銀台に詣り、一時に之を縦す。三司、府、縣の鞠獄は、皆な先ず輔國に詣りて咨稟し、輕重は意に隨い、制敕と稱して之を行う、敢えて違ふ者莫し。宦官は敢えて其の官を斥けず、皆な之を五郎(第五子)と謂う。李揆(裔は隴西に出)は山東の甲族なり、輔國を見、子弟の禮を執り、之を五父と謂う。

■ **[李峴の直言実施、輔國と隙]** 李峴の相と為るに及び、上の前に於いて叩頭し、論ず、
「制敕は皆な應に中書由り出でるべし」

と、具に輔國の専權亂政之狀を陳べ、上は感寤し、其の正直を賞す。輔國の行事は、變更する所多く、其の察事を罷める。輔國は是に由りて行軍司馬を讓り、本官(太子の詹事)に歸るを請い、上は許さず。壬寅(38)、制す、

「^{ちかごろ}比軍國の務めの殷なるに緣り、或は口敕を宣して處分す。諸色は取索し及び囚徒を杖配す、今より一切並せて停むる。如し正宣(中書に在りて檢覆して然る後に宣布したる詔勅)に非ざれば、並せて行ふを得ず。中外の諸務は、各々有司に歸すべし。英武軍(殿前の射生手)虞候(統括)及び六軍(北門の)諸使(内諸使)、諸司(内諸司)等は、比來或は因りて論競し、懸に自ら追攝す、今より一切須く台(御史台)、府(京兆府)を經るべし。如し由る所の處斷が平らかならざれば、狀を具して奏聞するを聽す。諸々の律令は十惡、殺人、奸、盜、造偽を除くの外は、餘の煩冗は一切刪除すべし。仍ほ中書、門下に委ね法官と詳定して聞奏せしむ。」

輔國は是に由りて峴を忌む。

■ **[各地に節度使設置]** 甲辰(40)、陳、鄭、亳節度使(嘗て節鎮を置かず、魯旻は南陽より之と為る)を置き、鄧州刺史の魯旻を以て之と為す。徐州刺史の尚衡を以て青、密等七州(青・密・登・萊・淄・沂・海)節度使(彭城より昇りて之を統べる)と為す。興平軍(本は雍州始平県、陝西省關中道興平県、現・咸陽市興平市)節度使の李奂(時に行營に在り)を以て豫、許、汝三州節度使を兼ねしむ。仍ほ各々境上に於いて守捉防禦せしむ。

■ **[魯旻は恥じて自死]** 九節度之相州に於いて潰える也、魯旻の部する所の兵は剽掠して尤も甚だし、郭子儀は退きて河上に屯し、李光弼が太原に還るを聞き、旻は漸じ懼れ、(12-325p)藥を飲み而して死す。

■ **[史思明は自ら大燕皇帝]** 史思明は自ら大燕皇帝を稱し、改元して順天とし、其の妻の辛氏を立てて皇后と為し、子の朝義を懷王と為し、周摯を以て相と為し、李歸仁を將と為し、范陽を改めて燕京と為し、諸州を郡と為す。

■[李抱玉はもとは安姓]戊申(44)、鴻臚卿の李抱玉を以て鄭、陳、穎、亳節度使と為す。抱玉は、安興貴(187 卷高祖武徳二年にあり)之後也、李光弼の裨將と為り、屢々戦功有り、自ら陳ず、

「安祿山と同姓なるを恥じる」

と、故に姓の李氏を賜わる。

回紇[寧國公主は殉死せず]回紇の毘伽闕可汗は卒し、長子の葉護は先に殺に遇い、國人は其の少子を立て、是を登裡可汗と為す。回紇は寧國公主を以て殉(殉死)と為さんと欲す。公主は曰く、

「回紇は中國之俗を慕い、故に中國の女を娶りて婦と為す。若し其の本俗に従わんと欲すれば、何ぞ必ずしも萬里之外に結婚する邪！」

然れども亦た之が為に面を髻り而して哭す。(漢北の俗、死者は屍を帳に停め、子孫及び親屬男女は各々牛馬を殺し、帳前に陣して之を祭り、帳を澆り馬を走らせて七匝し帳門に詣り、刀を以て面を髻り且つ哭し、血涙俱に流れる、此の如くすること七度にして止む)

■[毛若虚は威は朝廷に振う]鳳翔の馬坊押官(馬坊を管押する官)は劫を為す、天興(古の雍県、至徳二載は改めて鳳翔と曰い、仍ほ分けて天興を置き、鳳翔府を帯びる)の尉の謝夷甫は捕えて之を殺す。其の妻は冤を訟える。李輔國は素より飛龍殿より出、監察御史の孫鑿に救して之を鞠せしめ、冤無し。又た御史中丞の崔伯陽、刑部侍郎の李暉、大理卿の權獻をして之を鞠せしめ、鑿と同じ。妻は猶ほ服せず。又た侍御史の太平(絳州に属す県、山西省河東道汾城県、現・襄汾県汾城)の毛若虚をして之を鞠せしむ。若虚は傾巧の士にして、輔國の意を希い、罪を夷甫に歸す。伯陽は怒り、若虚を召して詰責し、之を劾奏せんと欲す。若虚は先ず自ら上に歸し、上は若虚を簾下に匿す。伯陽は尋いで至り、言う、

「若虚は中人に附會し、獄を鞠すること直ならず。」

上は怒り、叱して之を出だす。伯陽は高要の尉に貶せられ、獻は桂陽(漢の県、隋・唐は連州を帯びる。広東省嶺南道連県)の尉に貶せられ、暉は鳳翔の尹嚴向と皆な嶺下(嶺を渡りて南下する諸県を謂う。史は暉・向が貶せられる所の県の名を失す)の尉に貶せられ、鑿は除名され、播州に長く流される。吏部尚書、同平章事の李峴は奏す、

「伯陽等は無罪なり、之を責めるのは太だ重し」

上は以て朋黨と為し、五月、辛巳(17)、峴を蜀州刺史に貶す。右散騎常侍の韓擇木は入りて對し、上は之を謂って曰く、

「李峴は權を専らにせんと欲し、今蜀州に貶せらる、朕は自ら法を用いるに太いに寛なりと覺える。」

對えて曰く、

「李峴の言は直なり、專權に非ず。陛下は之を寛にすれば、只(続は抵)た聖徳を益さん耳。」

若虚は尋いで御史中丞に除せられ、威は朝廷に振う。

■壬午(18)、滑、濮節度使(新唐書方鎮表に、滑州に治す)の許叔冀を以て汴州刺史と為し、滑、汴等七州(新唐書方鎮表には滑・濮・汴・曹・宋の五州と)節度使に充てる。試汝州刺史の劉展を以て滑州刺史と為し、副使に充てる。

■六月、丁巳(53)、朔方を分けて邠、寧等九州(涇・原・寧・慶・坊・鄜・丹・延)節度使を置く。(12-326p)

【郭子儀に代わりて李光弼】

■[郭子儀は士卒を給いて去る]觀軍容使の魚朝恩は郭子儀を惡み、其の敗れるに因りて、之を上そしに短る。秋、七月、上は子儀を召して京師に還らしめ、李光弼を以て代わりて朔方節度使、兵馬元帥と為す。士卒は涕泣し、中使を遮りて子儀を留めるを請う。子儀は之を給いて曰く、

「我は中使を餞する耳、未だ行かざる也。」

因りて馬を躍して而して去る。

■[李光弼の東都支配は厳正]光弼は親王を得て之が副と為るを願ひ、辛巳(17)、趙王の系を以て天下兵馬元帥と為し、光弼を之が副とし、仍ほ光弼を以て諸節度行營に知たらしむ。光弼は河東の騎五百を以て馳せて東都に赴き、夜、其の軍に入る。光弼は軍を治めること嚴整なり、始めて至り、號令一たび施せば、士卒、壁壘、旌旗、精彩は皆な變ず。是の時朔方の將士は子儀之寛なるを楽しみ、光弼之嚴なるを憚る。

■[李光弼は張用濟を斬る]左廂兵馬使の張用濟は河陽に屯し、光弼は檄を以て之を召す。用濟は曰く、「朔方は、叛軍に非ざる也、夜に乗り而して入り、何ぞ疑わるる之甚だしき邪！」諸將と謀り精銳を以て東京に突入し、光弼を逐ひ、子儀を請わんとす。其の士に命じて皆な甲を被り馬に乗り、枚を銜んで以て待たしむ。都知兵馬使の僕固懷恩は曰く、「鄴城之潰えるや、郭公は先ず去り、朝廷は帥を責め、故に其の兵柄を罷む。今李公を逐ひ而して強いて之を請えば、朝命に違拒し(續は欠如)、是れ反する也、其れ可なる乎！」

右武鋒使の康元寶は曰く、

「君が兵を以て郭公を請えば、朝廷は必ず郭公は君を諷して之を為さしむと疑わん、是れ其の家を破る也。郭公百口は何ぞ君に負かん乎！」

用濟は乃ち止む。光弼は數千騎を以て東に汜水に出で、用濟は單騎にして來謁す。光弼は用濟が召し時に至らざるを責め、之を斬り、部將の辛京杲に命じて代わりて其の衆を領せしむ。

■[僕固懷恩の演技]僕固懷恩は繼いで至り、光弼は引きて坐せしめて、與に語る(李光弼は僕固懷恩を待つこと諸將よりも加える有り)。須臾にして、闇者は曰く、

「蕃、渾(諸蕃種及び渾種)の五百騎は至る矣。」

光弼は色を變ず。懷恩は走り出、麾下の將を召し、陽りて之を責めて曰く、

「汝に語りて來る勿からしむ、何ぞ固く違うを得る！」

光弼は曰く、

「士卒は將に隨う、亦た復た何の罪ぞや！」

命じて牛酒を給せしむ。(僕固懷恩は備えを成して而る後に光弼を見る。光弼は其の情を知ると雖も容忍して發せず)

■丁亥(23)、潞沁節度使の王思禮(王思禮は澤潞沁三州を節度す。史は澤潞、或いは潞沁と稱す)を以て太原尹を兼ねしめ、北京留守(李光弼に代わらしむ)、河東節度使に充てる。

■[張光晟は王思禮に馬を授けるの功]初め、潼關之敗れるや(218 卷至徳元載にあり)、思禮の馬は矢に中たり而して斃れ、騎卒の整屋の張光晟有り馬を下りて之に授け、其の姓名を問ひ、告げず而して去る。思禮は陰に其の狀貌を識り、之を求めて獲ず。河東に至るに及び、或は代州刺史の河西の辛雲京(蘭州金城の人)を譖し、思禮は之を怒り、雲京は懼れ、出ざる所を知らず。光晟は時に雲京の麾下に在り、曰く、

「光晟は嘗て王公(王思禮)に於いて徳有り、從來敢えて言わざる者は、此を以て賞を取るを恥じる耳。今使君に急有り、光晟は往きて王公に見えるを請う、必ず使君の為に之を解かん。」

雲京は喜び、即ち之を遣る。光晟は思禮に謁し、未だ言うに及ばず、思禮は之を識り、曰く、

「噫！子は吾が故人に非ざる乎？何ぞ相い見る之晩き邪！」

光晟は實を以て告げ、思禮は大いに喜び、其の手を執り、流涕して曰く、

「吾之今日有るは、皆な子の力也、(12-327p) 吾は子を求めて久し矣。」

引きて與に榻を同じくして坐し、約して兄弟と為る。光晟は因りて従容として雲京之冤を言う。思禮は曰く、

「雲京の過ちは亦た細ならず、今日特に故人の為に之を捨てん。」

即日光晟を擢んでて兵馬使と為し、金帛田宅を贈ること甚だ厚し。(胡三省曰く、張光晟が王思禮に於けるは君子と謂う可し。その後徳宗に事え、職を失うを以て懇望し、遂に身を朱泚に委ねる。何ぞ前後の相違するやと)

■**[僕固懷恩の勇は三軍に冠たり]**辛卯(27)、朔方節度副使、殿中監の僕固懷恩を以て太常卿を兼ねしめ、爵を大寧郡王に進める。懷恩は郭子儀に従して前鋒と為り、勇は三軍に冠たり、前後の戦功は多きに居り、故に之を賞す。

■**[康楚元は南楚霸王を称す]**八月、乙巳(41)、襄州の將の康楚元、張嘉延は州に據りて亂を作し、刺史の王政は荊州に奔る。楚元は自ら南楚霸王と稱す。

■**[回紇]**回紇は寧國公主(前卷前年に嫁すあり)の子無きを以て、歸るを聽す。丙辰(52)、京師に至る。

■**[康楚元の慰撫失敗]**戊午(54)、上は將軍の曹日昇をして襄州に往きて康楚元を慰諭せしめ、王政を貶して饒州長史と為し、司農少卿の張光奇を以て襄州刺史と為す。楚元は従わず。

■壬戌(58)、李光弼を以て幽州長史、河北節度等使と為す。(之をして河北・幽州・燕州を收復させる)

■**[張嘉延により荊州周辺の崩壊]**九月、甲午(30)、張嘉延は襲いて荊州を破り、荊南節度使(荆・澧・朗・郢・復・夔・峽・忠・萬・歸)の杜鴻漸は城を棄てて走り、澧、朗、郢、峽、歸等の州の官吏は之を聞き、争いて山谷に潜竄す。

■**[乾元重寶大錢]**戊辰(4)、更に絳州に令して乾元重寶大錢(径一寸二分、文は亦た乾元重寶)を鑄しめ、加えるに重輪(背の外郭)を以てし、一は五十に當る(緡毎に重さ十二斤、重稜錢と号す)。(唐の世に錢を鑄るに大凡天下の諸鑄99、而して絳州の鑄30。其の余の諸鑄は或いは江嶺を隔て、或いは寇虜に没す。故に當時の鑄錢は率ね絳州に倚る)在京の百官は、先に以えらく、

「軍旅俸祿無くして畢る、宜しく新錢を以て其の冬料(各官の冬季に得るべき俸料錢)を給すべし。」

■**[崔光遠を荆、襄招討使]**丁亥(23)、太子の少保の崔光遠を以て荆、襄招討使と為し、山南東道處置兵馬都使に充てる。陳、穎、亳、申節度使の王仲升を以て申、沔等五州(申・光・壽・安・沔)節度使と為し、淮南西道行軍兵馬に知たらしむ。

【東都からの撤退】

■**[史思明の河南進出]**史思明は其の子の朝清をして范陽を守らしめ、諸郡太守に命じて各々兵三千を將いて己に従いて河南に向かわしめ、分けて四道と為し、其の將の令狐彰をして兵五千を將いて黎陽より河を濟りて滑州を取らしめ、思明は濮陽より、史朝義は白皋(滑州の西北岸、現・河南省安陽市滑州周辺)より、周摯は胡良より河を濟り、汴州に會す。

■**[許叔冀は李光弼を裏切る]**李光弼は方に河上の諸營を巡りて、之を聞き、還りて汴州に入り、汴滑節度使の許叔冀に謂って曰く、

「大夫は能く汴州を守ること十五日なれば、我は則ち兵を將いて來たり救わん。」

叔冀は許諾す。光弼は東京に還る。思明は汴州に至り、叔冀は與に戦いて、勝たず、遂に濮州刺史の董秦及び其の將の梁浦、劉從諫、田神功等と之に降る(許叔冀はついに張鎰の言のごとし)。思明は叔冀を以て中書令と為し、其の將の李詳と汴州を守らしむ。(12-328p)厚く董秦を待ち、其の妻子を収め、長蘆(漢の參戸県の地。直隸省津海道滄県、現・河北省滄州市滄県)に置いて質と為す。其の將の南德信をして梁浦、劉從諫、田神功等

數十人と江、淮に徇え使む。神功は、南宮(冀州に属す。直隸省大名道南宮県西北、現・河北省邢台市南宮市)の人也。思明は以て平盧兵馬使と為す。之頃して、神功は徳信を襲い、之を斬る。從諫は身を脱して走る。神功は其の衆を將いて來降す。

■[李光弼は洛陽から戦略的撤退]思明は勝ちに乗りて西に鄭州(滎陽郡)を攻める。光弼は衆を整えて徐ろに行き、洛陽に至り、留守の韋陟に謂って曰く、

「賊は勝ちに乗り而して來たり。利は兵を按ずるに在り、速戦に利あらず。洛城は守る可からず、公に於いては計は何如？」

陟は兵を陝に留め、退きて潼關を守り、險に據りて以て其の銳を挫くを請う。光弼は曰く、

「兩敵は相い当たれば、進むを貴び退くを忌む、今故無く五百里の地を棄てれば、則ち賊勢は益々張らん矣。若かず軍を河陽に移し、北に澤潞を連ね、利あれば則ち進み取り、利あらざれば則ち退きて守る、表裡相い應じ、賊をして敢えて西に侵さしめず、此れ猿臂之勢(猿臂は伸ばして長くす可く、縮めて短くす可し、故に以て喩と為す)也。夫れ朝廷之禮を辨ずれば、光弼は公に如かず。軍旅之事を論ずるは、公は光弼に如かず。」

陟は以て應える無し。判官の韋損は曰く、

「東京は帝宅なり、侍中(李光弼は至徳の初め已に司空と為る。乾元元年に侍中と為る、故に韋損は此れを以て之を呼ぶ)は奈何して守らざるや？」

光弼は曰く、

「之を守れば、則ち汜水(成皋の險有り)、崕嶺(登封県に在り)、龍門(伊関)は皆な應じて兵を置くべし、子は兵馬判官為り、能く之を守る乎？」

遂に牒を留守の韋陟に移し東京の官屬を帥いて西に關に入らしめ、河南尹の李若幽に牒して吏民を帥いて城を出て賊を避け、其の城を空しくせしむ。光弼は軍士を帥いて油、鐵諸物を運び河陽に詣りて守備を為し、光弼は五百騎を以てしんがり殿す。時に思明の遊兵は已に石橋(水滄注に、穀水は東して洛陽の廣莫門の北を經、漢の穀門なり、東して建春門の石橋下を經、即ち上東門なりと。此に言える漢晋の洛城の諸門は、隋唐の徒る所の洛城に非ざるなり。上東門の地は唐は鎮と為す)に至り、諸將は請いて曰く、

「今洛城より而して北せん乎、石橋に當り而して進む乎？」

光弼は曰く、

「石橋に當り而して進まん。」

日暮れるに及び、光弼は炬を乗(乗×)りて徐行し、部曲は堅重なり、賊は兵を引いて之を躡むも、敢えて逼らず(躡むは恐懼して自壊させるため、敢えて迫らないは嚴整にして犯し難し)。光弼は夜河陽に至り、兵二萬有り(胡三省曰く、郭子儀は滏水より退きて河陽を守るや、衆は数万に及ぶ。李光弼が河陽に至るに及びて兵二万有り。何ぞ衆寡の相懸るや。蓋し張川濟が死するや、朔方の士卒は威を畏れて逃散する者多きなりと)、糧は才に十日を支える。光弼は守備を按閲し、士卒を部分し、嚴辦せざる無し。庚寅(26)、思明は洛陽に入り、城は空しくして、得る所無く、光弼が其の後を拵せんことを畏れ、敢えて宮に入らず、退きて白馬寺の南に屯し、月城を河陽の南に築き以て光弼を拒む。是に於いて鄭、滑等の州は相い繼いで陥没し、韋陟、李若幽は皆な陝に寓治す。冬、十月、丁酉(33)、制を下して史思明を親征せんとす。群臣は上表して諫め、乃ち止む。

【河陽攻防戦】

■[白孝徳は劉龍仙を単騎で打ち取る]史思明は兵を引いて河陽を攻め、驍將の劉龍仙をして城下に詣りて挑戦せしむ。龍仙は勇を恃み、(12-329p)右足を舉げて馬鬣の上に加え、光弼を慢罵す。光弼は諸將を

顧みて曰く、

「誰か能く彼を取る者をや？」

僕固懷恩は行くを請う。光弼は曰く、

「此れ大將の為す所に非ず。」

左右は言う、

「裨將の白孝徳は往く可し。」

光弼は召して之を問う。孝徳は行くを請う。光弼は問う、

「幾何の兵を須いるや？」

對えて曰く、

「身を挺して之を取るを請う。」

光弼は其の志を壯とし、然も固く須いる所を問ひ。對えて曰く、

「願わくは五十騎を選んで壘門を出でて後繼と為すべし、兼ねて請う大軍は助けて鼓噪し以て氣を増すべし。」

光弼は其の背を撫で而して之を遣る(既に其の勇氣を賞し、而して其の敵を取るの方略有るを賞す)。孝徳は二矛を挟み、馬を策むちうち流れを亂して(横切りて流れを渡るをいう)而して進む。半ば涉り、懷恩は賀して曰く、

「克たん矣。」

光弼は曰く、

「鋒は未だ交わず、何を以て之を知るや？」

懷恩は曰く、

「其の轡を攬ること安閒なるを觀、其の萬全を知る。」

龍仙は其の獨り來たるを見、甚だ之を易んず。稍々近づき、將に動かんとし、孝徳は手を搖らして之を示し、來たりて敵を為す者に非ざるが若し、龍仙は測らず而して止む。之を去ること十歩、乃ち之と言う、

龍仙は慢罵すること初めの如し。孝徳は馬を息めること良く久しく(馬力の完復させる)、因りて目を瞋らして謂って曰く、

「賊は我を識る乎？」

龍仙は曰く、

「誰ぞ也？」

曰く、

「我は、白孝徳也。」

龍仙は曰く、

「是れ何の狗彘(犬と猪兒)ぞや！」

孝徳は大呼して、矛を運めぐらして馬を躍らして之を搏つ。城上は鼓噪し、五十騎繼ぎて進む。龍仙は矢發するに及ばず、環りて堤上に走る。孝徳は追及し、斬首し、之を攜えて以て歸る。賊衆は大いに駭く。孝徳は、本は安西の胡人也。

■[史思明の馬を騙す、舟を阻止]思明は良馬千餘匹有り、毎日河南の渚に出して之を浴し、循環して休まらず以た多きを示す。光弼は命じて軍中の牝馬を索めしめ、五百匹を得、其の駒を城内に繋ぐ。思明の馬の水際に至るを俟ち、盡く之を出し、馬は嘶きて已まず、思明の馬は悉く浮かびて河を渡り(牝馬を慕う)、一時に之を驅りて城に入れる。思明は怒り、戰船數百艘を列ね、火船を前に泛べ而して之に隨い、流れに乗

りて浮橋を焼かんと欲す。光弼は先ず百尺の長竿數百枚を貯め、巨木を以て其の根を承け、氈に鐵叉を裹みて其の首に置き、以て火船を迎え而して之を叉す。船は進むを得ず、須臾にして自ら焚け盡くす。又た叉を以て戰船を拒み、橋上に於いて(続は欠如)砲石を發して之を撃ち、中たる者は皆な沉沒す、賊は勝たず而して去る。

■[李光弼は策で二將を降す]思明は兵を河清(南の方黄河に臨む)に見せ、光弼の糧道を絶たんと欲し、光弼は野水の渡しに軍し以て之に備える。既に夕べとなり、河陽に還り、兵千人を留め、部將の雍希顥をして其の柵を守らせめ、曰く、

「賊將の高庭暉、李日越、喻文景は、皆な萬人の敵也。思明は必ず一人をして來たりて我を劫かさせめん。我は且く之を去らん、汝は此に待て。若し賊至れば、之と戦う勿れ。降れば、則ち之と俱に來たれ。」諸將は其の意を諭る莫し、皆な竊に之を笑う。既に而して思明は果たして李日越に謂って曰く、

「李光弼は城に憑るに長ず、今出でて野に在り、此れ擒と成らん矣。汝は鐵騎を以て宵に濟り、我が為に之を取れ、得ざれば、則ち返る勿れ。」(12-330p)

日越は五百騎を將いて晨に柵下に至り、希顥は壕を阻てて卒を休め、吟嘯して相い視る。日越は此れを怪しみ(戰意無きを怪しむ)、問いて曰く、

「司空(李光弼)は在る乎？」

希顥は曰く、「夜去れり矣。」

日越は曰く、「兵は幾何ぞ？」

希顥は曰く、「千人なり。」

日越は曰く、「將は誰なるや？」

希顥は曰く、「雍希顥なり。」

日越は默計すること之れ久しく、其の下に謂って曰く、

「今李光弼を失い、希顥を得而して歸れば、吾が死するは必ずなり矣、降るに如かざる也。」

遂に降を請う。希顥は之と俱に光弼に見え、光弼は厚く之を待ち、任ずるに心腹を以てす。高庭暉は之を聞き、亦た降る。或は光弼に問う、

「二將を降すこと何ぞ易き也？」

光弼は曰く、

「此れ人情なる耳。思明は常に野戦を得ざるを恨む、我が外に在るを聞き、以て必ず取る可きと為す。日越は我を獲ざれば、勢いは敢えて歸らず。庭暉は才勇は日越に過ぎ、日越が寵任せらるるを聞き、必ず之を奪わんことを思わん矣。」

庭暉は時に五台府(代州にあり)の果毅(唐の諸府の果毅は品秩猶ほ卑し。諸衛大將軍は三品)為り。己亥(35)、庭暉を以て右武衛大將軍と為す。

■[李抱玉は河陽を守る]思明は復た河陽を攻め、光弼は鄭陳節度使(乾元二年に置く、鄭陳亳潁四州を領せしむ。然れどもこの時既に史思明)の李抱玉に謂って曰く、

「將軍は能く我が為に南城を二日守る乎？」

抱玉は曰く、

「期を過ぎる何如せん？」

光弼は曰く、

「期を過ぎて救い至らざれば、之を棄てるに任せん。」

抱玉は許諾し、兵を勅して拒み守る。城は且に陥ちんとし、抱玉は之を給いて曰く、
「吾は糧盡き、明くる旦に當に降らん。」

賊は喜び、軍を斂めて以て之を待つ。抱玉は城の備えを繕完し、明くる日、復た戦うを請う。賊は怒り、急に之を攻める。抱玉は奇兵を出し、表裡夾撃し、殺傷は甚だ衆し。

■[荔非元禮の奮撃]董秦は思明に従いて河陽を寇す。夜其の衆五百を帥い、柵を抜き圍みを突き、光弼に降る。時に光弼は自ら將いて中渾(河の中に石渾を起こし、城を築きて以て河橋を衛る。渾は沙出ずる所)城外に屯し柵を置き、柵外に塹を穿ち、深廣は二丈。乙巳(41)、賊將の周摯は南城を捨て、力を並せて中渾を攻める。光弼は荔非元禮に命じて勁卒を羊馬城(城外に別に矩垣を築き、高さ纔に肩に及ぶ。城郭の外 15.5m ほどの濠の内側に築く土墻)に出し以て賊を拒む。光弼は自ら城の東北隅に於いて小朱旗を建て以て賊を望む。賊は其の衆を恃みて、直進して城に逼り、車を以て攻具を載せて自らに随わしめ、衆を督して塹を埋め、三面各々八道以て兵を過ごし、又た柵を開いて門と為す。光弼は賊が城に逼るを望み、元禮に(人をして)問わ使めて曰く、
「中丞は賊が塹を埋め柵を開き過兵を過ごすを視、晏然として動かず、何ぞ也？」

元禮は曰く、「司空は守らんと欲する乎、戦わん乎？」

光弼は曰く、「戦わんと欲す。」

元禮は曰く、「戦わんと欲すれば、則ち賊が吾が為に塹を埋めるを、何ぞ之を禁ぜん？」

光弼は曰く、「善し、吾の及ばざる所なり、之に勉めよ！」(其の敢えて戦うを賞すと雖も、戦いは危事なり)

元禮は柵の開くを俟ち、敢死の士を帥いて突出して賊を撃ち、卻き走ること數百歩。元禮は賊陣の堅く、未だ摧陷し易からざるを度り、乃ち復た引き退き、其の怠るを須ち而して之を撃つ。光弼は元禮の退くを望見し、(12-331p)怒り、左右を遣わして召し、之を斬らんと欲す。元禮は曰く、
「戦いは正急なり、召して何を為すや？」

乃ち退きて柵中に入る。賊も亦た敢えて逼らず。良く久しく、鼓噪して柵門を出、奮撃し、之を破る。

■[李光弼は決死の覚悟で勝利]周摯は復た兵を収めて北城に趣く。光弼は遽に衆を帥いて北城に入り、城に登りて賊を望んで曰く、

「賊兵は多しと雖も、^{かまびす}囂しく而して整わず、畏れるに足らざる也。日中を過ぎずして、保して諸君の為に之を破らん。」

乃ち諸將に命じて出で戦わしむ。期に及び、決せず、諸將を召して問いて曰く、

「向に來たり賊陣は、何れの方が最も堅きや？」

曰く、

「西北隅なり。」

光弼は其の將の郝廷玉(光弼の愛將)に命じて之に当たらしむ。廷玉は騎兵五百を請う、之に三百を與える。又た其の次に堅なる者を問う。曰く、

「東南の隅なり。」

光弼は其の將の論惟貞(吐蕃出身の將)に命じて之に当たらしむ。惟貞は鐵騎三百を請い、之に二百を與える。光弼は諸將に令して曰く、

「爾が輩は吾が旗を望み而して戦へ、吾が旗を颯かすこと緩ならば、爾が利を擇び而して戦うに任せる。吾が急に旗を颯かして三たび地に至れば、則ち萬衆齊しく入り、死生之を以てすべし、少しく退く者は斬らん！」

又た短刀を以て靴(統は鞞)中に置き、曰く、

「戦いは、危事なり。吾は國之三公なり、賊の手に死す可からず。萬一戦いに利あらざれば、諸君は前みて敵に死せよ、我は自ら此に劉^{くびは}ねん、諸君をして獨り死せ令めざる也。」

諸將は出で戦い、之頃して、廷玉は奔り還る。光弼は之を望み、驚いて曰く、

「廷玉は退く、吾が事危うし矣！」

左右に命じて廷玉の首を取らしめんとし、廷玉は曰く、

「馬は箭に中たる、敢えて退くに非ざる也。」

使者は馳せて報ず。光弼は馬を易えて、之を遣ら令む。僕固懷恩及び其の子の開府儀同三司の瑒は戦いて小しく卻き、光弼は又た命じて其の首を取ら令む。懷恩父子は顧みて使者が刀を掲げて馳せ來たるを見、更に前みて決戦す。光弼は連りに其の旗を颯かし、諸將は齊しく進みて死を致し、呼聲は天地を動かし、賊衆は大いに潰え、斬首は千餘級、捕虜は五百人、溺死する者は千餘人。周摯は數騎を以て遁げ去る、其の大將の徐璜玉、李秦授を擒とす、其の河南節度使の安太清は走りて懷州を保つ。思明は摯の敗れるを知らず、尚ほ南城を攻め、光弼は俘囚を驅りて河に臨みて之を示し、乃ち遁げる。

■丁巳(53)、李日越を以て右金吾大將軍と為す。

■邛、簡(漢の牛鞞廣都の地、隋の仁壽の初め、簡州を置く。四川省西川道簡陽県、現・成都市簡陽市)、嘉、眉、瀘、戎等の州の蠻は反す。

■十一月、甲子(0)、殿中監の董秦を以て陝西、神策兩軍の兵馬使と為し、姓の李、名の忠臣を賜わる。

■[康楚元の討伐]康楚元等の衆は萬餘人に至る。商州刺史、充荆襄等道租庸使の韋倫は兵を發して之を討ち、鄧之境に駐まり、降る者を招諭し、厚く之を撫す。其の稍怠たるを伺い、進軍して之を撃ち、楚元を生きて擒とし、其の衆は遂に潰える。其の掠める所の租庸二百萬緡を得、荆、襄は皆な平らぐ。倫は、見素(天寶より至徳に至るまで相たり)之從祖の弟也。安西、北庭の兵を發して陝に屯せしめ、以て史思明に備える。

■[第五琦の左遷]第五琦は乾元錢、重輪錢を作り、開元錢と三品は並せて行われ、民は争いて盜鑄し、貨は軽く物は重く、(12-322p)穀價は騰踴、餓殍は相い望む。上言する者は皆な咎を琦に歸し、庚午(6)、琦を忠州(漢の臨江墊江枳県の地。唐の初め置く。地は巴徼に辺す。四川省東川道忠県、現・重慶市忠県)長史に貶す。御史大夫の賀蘭進明を溱州員外司馬に貶す、琦の黨に坐す也。

■十二月、甲午(30)、呂誼は度支使を領す。

■乙巳(41)、韋倫は康楚元を送りて闕に詣り、之を斬る。

■[李忠臣は李歸仁を破る]史思明は其の將の李歸仁を遣わして鐵騎五千を將いて陝州を寇し、神策兵馬使の衛伯玉は數百騎を以て之を礪子阪(河南の永寧県の西)に撃破し、馬六百匹を得、歸仁は走る。伯玉を以て鎮西四鎮行營節度使と為す。李忠臣は歸仁等と永寧(漢の宜陽県西界の地。北周は同軌郡及び熊耳県・嶠県を置く。隋は郡及び嶠県を廢す。義寧元年に改めて永寧県と為す。河南省河洛道洛寧県、現・洛陽市洛寧県)、莎柵(河南省河洛道洛寧県の東北)之間に戦い、屢々之を破る。

肅宗文明武德大聖大宣孝皇帝下之上上元元年(庚子、760年)

■春、正月、辛巳(17)、李光弼を以て太尉兼中書令と為し、餘は故の如し。

■丙戌(22)、于闐王の勝之弟の曜を以て四鎮節度副使に同じく、本國の事を權知せしむ。(于闐王と四鎮節度

使と皆行當に在り、故に其の弟をして節度副使と興に国事を權せしむ)

■ **[党項等の羌は京畿に迫る]** 党項等の羌は邊鄙を吞噬し、將に京畿に逼らんとし、乃ち邠寧等州節度(九州を領す)を分けて鄜坊丹延節度と為し、亦た之を渭北節度(四州)と謂う。邠州刺史の**桑如珪**を以て邠寧、鄜州の刺史を領せしめ、**杜冕**をして鄜坊節度副使領を領せしめ、分道して招討す。戊子(24)、**郭子儀**を以て兩道(邠寧・鄜坊)節度使を領せしめ、京師に留め、其の威名を假り以て之を鎮す。

■ 上は九宮貴神を祀る。

■ 二月、**李光弼**は懷州を攻め、**史思明**は之を救う。癸卯(39)、**光弼**は逆えて沁水之上に戦い、之を破り、斬首は三千餘級なり。

■ **[第五琦に追い打ち]** 忠州長史の**第五琦**は既に行き、或は告げる、

「**琦**は人の金二百兩を受ける」

と、御史の**劉期光**を遣わして追いて之を按ぜしむ。**琦**は曰く、

「**琦**は位に宰相に備わり、二百兩金は手挈す可からず。若し付受、憑(證據)有れば、請う律に准じて罪を科すべし。」

期光は即ち奏す、

「**琦**は已に罪に服す。」

庚戌(46)、**琦**は坐して除名され、夷州(貴州省鎮遠道鳳泉県西北、現・遵義市鳳岡県)に長流せらる。

■ 三月、甲申(20)、蒲州を改めて河中府と為す。

■ 庚寅(14)、**李光弼**は**安太清**を懷州城下に破り、**夏**、四月、壬辰(28)、**史思明**を河陽の西渚に破り、斬首は千五百餘級。

■ **[張維瑾の乱、鎮圧]** 襄州の將の**張維瑾**、**曹玠**は節度使の**史翽**を殺し、州に據りて反す。制して隴州刺史の**韋倫**を以て(12-333p)山南東道節度使(襄・鄧・隨・唐・安・均一・房・金・商の九州、襄に治す)と為す。時に**李輔國**は事を用い、節度使は皆な其の門を出る。**倫**は既に朝廷の除する所と為り、又た**輔國**に謁せず、尋いで秦州防禦使に改める。己未(55)、陝西節度使の**來瑱**を以て山南東道節度使と為す。**瑒**は襄州に至り、**張維瑾**等は皆な降る。

■ 閏月、丁卯(3)、河東節度使の**王思禮**に加えて司空と為す。武德より以來、**思禮**は始めて宰相と為らず而るに三公を拜す。

■ 甲戌(10)、趙王の**系**を徙して越王と為す。

■ **[太公望に追諡して武成王]** 己卯(15)、天下に赦し、改元(上元)す。**太公望**に追諡して武成王と為し、歴代の名將を選んで亞聖、十哲(秦の白起・漢の韓信・蜀の諸葛亮・唐の李靖・李勣を左に列し、漢の張良・齊の田穰苴・呉の孫武・魏の呉起・燕の樂毅を右に列す)と為す。其の中祀、下祀並びに雜祀は一切並せて停む。(早の故なり。唐六典に昊天上帝。五方帝・皇地祇・神州・宗廟を大祀と為し、日月星辰・社稷・先代の帝王・岳鎮・海濱・帝社・先蠶・孔宣父・齊の太公・諸太子廟を中祀と為し、司中・司命・風師・雨師・衆星・山林川澤・五熊祠等及び州県の社稷・釋奠を小祀と為す。雜祀は蓋し小鬼の神なり)

■ **[史思明は洛陽に入る]** 是の日、**史思明**は東京に入る。

■ **[苗晉卿は胡廣に比す]** 五月、丙午(42)、太子の太傅の**苗晉卿**を以て侍中を行わしむ。**晉卿**は吏事に練達し、而して身を謹みて位を固くす、時の人は之を**胡廣**に比す。

■ 宦者の**馬上言**は賂を受け、人の為に官を兵部侍郎、同中書門下三品の**呂譔**に求め、**譔**は之が為に官を補う。事は覺われ、**上言**は杖死す。壬子(48)、**譔**は罷めて太子の賓客と為る。

■ **[財務官僚の劉晏]** 癸丑(49)、京兆尹の**南華**(本は漢の離狐県、歴代名を更めず。天寶元年に名を南華県と更む。曹州に属

す。直隸省大名道東明県の東南、現・山東省荷沢市東明県)の劉晏を以て戸部侍郎と為し、度支、鑄錢、鹽鐵等使に充てる。晏は善く財利を治め、故に之を用いる。

■六月，甲子(0)，桂州經略使の邢濟は奏す、西原蠻(廣容の南・邑桂の西に居る)二十萬衆を破り、其の帥の黃乾曜等を斬ると。

■乙丑(1)，鳳翔節度使の崔光遠は奏す、涇、隴羌、渾十餘萬衆を破ると。(続は欠如)

■[私鑄錢を禁じる能わず]三品錢(開元錢・乾元小錢・重輪錢)は行うこと浸く久しく、歲荒に屬し、米斗ごとに七千錢に至り、人は相い食む。京兆尹の鄭叔清は私鑄錢する者を捕え、數月間、榜死する者は八百餘人、禁じる能わず。乃ち京畿に敕し、開元錢と乾元小錢とは皆な十に當て、其の重輪錢は三十に當て、諸州は更に進止を俟たしむ。是の時史思明も亦た順天得一錢(徑一寸四分、既にして得一は長祚の兆に非ざるを以て、其の文を改めて順天元寶という)を鑄る、一は開元錢百に當る。賊中物價は尤も貴し。

■[皇太子定まる]甲申(20)，興王の召は薨ず。召は、張後の長子也、幼なるを定王の侗と曰う。張後は故を以て數々太子を危くせんと欲しに、太子は常に恭遜を以て容を取る。會々召は薨じ、侗は尚ほ幼く、太子の位は遂に定まる。

■[党項]乙酉(21)，鳳翔節度使の崔光遠は党項を普潤(鳳翔府に屬す、陝西省閩中道麟遊県の西、現・宝鸡市麟遊県)に破る。

■平盧兵馬使の田神功は奏す、

「史思明之兵を鄭州に破る。」(12-334p)

【李輔國は玄宗上皇を翻弄】

■[玄宗上皇の宴会]上皇は興慶宮を愛し、蜀より歸り(前卷至徳二載にあり)、即ち之に居る。上は時に夾城(開元二十年に築く)より往きて起居し、上皇も亦た間々大明宮に至る。左龍武大將軍の陳玄禮、内侍監の高力士は久しく上皇に侍衛す。上は又た玉真公主、如仙媛、内侍の王承恩、魏悅及び梨園の弟子に命じて常に左右に娛侍せしむ。上皇は多く長慶樓(大道に臨む)に御し、父老の過ぎる者は往往に瞻拜して、萬歳と呼び、上皇は常に樓下に於いて酒食を置きて之に賜う。又た嘗て將軍の郭英乂等を召し樓に上らせて宴を賜る。劍南の奏事官(諸道は官を遣わして京師に入り、事を奏せしむる者)有り樓下を過ぎて拜舞し、上皇は玉真公主、如仙媛に命じて之が為に主人と作らしむ。

■[李輔國は肅宗を惑わす]李輔國は素は微賤なり、^{におか}暴に貴くして事を用いると雖も、上皇の左右は皆な之を輕んず。輔國は意に恨みとし、且つ奇功を立てて以て其の寵を固くせんと欲し、乃ち上に言つて曰く、

「上皇は興慶宮に居り、日々外人と交通し、陳玄禮、高力士は陛下に利あらざるを謀る。今六軍の將士(肅宗に隨う)は盡く靈武の勳臣にして、皆な反仄して安ぜず、臣は曉諭し解く能わず、敢えて以て聞せざるんばあらず。」

上は泣いて曰く、

「聖皇(肅宗は上皇に尊号を上る)は慈仁なり、豈に此れ有る容けんや！」

對えて曰く、

「上皇は固より此の意無く、其れ群小を如せん何！陛下は天下の主為り、當に社稷の大計を為し、亂を未萌に消すべし、豈に匹夫之孝に徇うを得んや！且つ興慶宮は閭閻(庶民)と相い^{まじ}参わり、垣墉淺露にして、至尊の宜居する所に非ず。大内は深嚴なり、奉じて迎えて之に居けば、彼と何ぞ殊ならん、又た小人が聖

聽を熒惑するを杜絶するを得ん。此くの如く、**上皇**の萬歲之安きを享け、**陛下**は三朝之樂しみ(文玉が世子たるや王季に朝すること日に三たびす)有らん、庸何ぞ傷まん乎！」

上は聽さず。興慶宮は先に馬三百匹有り、**輔國**は敕を矯めて之を取り、才に十匹を留める。**上皇**は**高力士**に謂って曰く、

「吾が兒は**輔國**の惑わす所と為り、孝を終わるを得ざらん矣。」

■**[李輔國は玄宗を擁するを失敗]****輔國**は又た六軍の將士をして、號哭叩頭して、**上皇**を迎えて西内に居かんと請わ令む。上は泣きて應えず。**輔國**は懼れる。會々上は不豫なり、**秋**、七月、丁未(43)、**輔國**は上の語を矯稱し、**上皇**を迎えて西内に遊ばしめ、睿武門に至り、**輔國**は射生五百騎を將い、刃を露わして道を遮りて奏して曰く、

「**皇帝**は興慶宮の湫隘(下で狭小)なるを以て、**上皇**を迎えて遷りて大内に居らしむ。」

上皇は驚き、幾んど墜ちんとす。**高力士**は曰く、

「**李輔國**は何ぞ無禮なるを得る！」

叱して馬を下ら令める。**輔國**は已むを得ず而して下る。**力士**は因りて**上皇**の誥を宣して曰く、

「諸將士は各々好在(猶ほ好生と言うがごとし。兵を以て乘輿を干すを得ざれの意味)なれ！」

將士は皆な刃を納め、再拜して、萬歲を呼す。**力士**は又た**輔國**を叱し己と共に**上皇**の馬鞍を執らしめ、侍衛して西内(兩儀殿を以て内朝と為す)に如き、甘露殿(兩儀殿の北に甘露門有り、その内をいう)に居る。**輔國**は衆を帥い而して退く。留まる所の侍衛の兵は、才に尙老數人なり。**陳玄禮**、**高力士**及び舊宮の人は皆な左右に留まる能(續は得)わず。(12-335p)**上皇**は曰く、

「興慶宮は、吾之玉地なり(209 卷睿宗景雲元年にあり)、吾は數々以て**皇帝**に讓るも、**皇帝**は受けず。今日之徙は、亦た吾が志也。」

是の日、**輔國**は六軍(北門の)の大將と素服して上を見、罪を請う。上は又た諸將に迫り、乃ち之を勞りて曰く、

「南宮(興慶宮)、西内、亦た復た何ぞ殊ならん！卿等は小人が熒惑せんことを恐れ、微を防ぎ漸を杜ぎ、以て社稷を安んず、何の懼るる所あらん也！」

刑部尚書の**顏真卿**は首として百寮を帥いて上表し、**上皇**の起居を問わんと請う。**輔國**は之を惡み、奏して蓬州(漢の宕渠県、四川省嘉陵道當山県、現・南充市當山県)長史に貶す。

■癸丑(49)、天下に敕し重稜錢は皆な三十に當る、畿内の如くす。

■**[高力士らの左遷]**丙辰(52)、**高力士**は巫州(貞觀八年に辰州龍標県を分けて置く、四川省東川道巫山県、現・重慶市巫山県)に流され、**王承恩**は播州(秦の夜郎郡の南境、隋の牂柯県、貞觀十一年に置く、貴州省黔中道遵義県、現・遵義市播州区)に流され、**魏悅**は溱州(貞觀十六年に山洞を開いて置く、現・重慶市)に流され、**陳玄禮**は勅して致仕す。**如仙媛**を歸州(漢の秭歸県、武徳二年に秭歸巴東二県を分けて置く、湖北省荆南道秭歸県、現・宜昌市秭歸県)に置き、**玉真公主**を出して玉真觀(睿宗が主の為に起こす所)に居る。上は更に後宮の百餘人を選び、西内に置き、灑掃に備える。**萬安**、**咸宜**の二公主(上皇の女)をして服膳を視令む。四方の獻ずる所の珍異は、先ず**上皇**に薦める。然るに**上皇**は日々以て憚らず、因りて茹葷せず、谷を辟け、浸く以て疾と成る。上は初め猶ほ往きて安を問ひ、既に而して上も亦た疾有り、但だ人を遣わして起居す。其の後上は稍悔寤し、**輔國**を惡み、之を誅さんと欲し、其の兵を握るを畏れ、竟に猶豫して決する能わず。

■**[衛伯玉を神策軍節度使]**初め、**哥舒翰**は吐蕃を臨洮の西關の磨環川に破り(會要に、天寶十三載、哥舒翰は前年に九曲を収めるを以て、請いて其の地を以て洮陽郡を置く。臨洮郡をさること二百里)、其の地に於いて神策軍を置く。**安祿**

山の反するに及び、軍使の**成如璆**は其の將の**衛伯玉**を遣わして千人を將いて難に赴かしむ。既に而して軍地は吐蕃に淪入し、**伯玉**は留まりて陝に屯し、累官して右羽林大將軍に至る。八月，庚午(6)，**伯玉**を以て神策軍節度使と為す。

■丁亥(23)，興王の**召**に贈諡して**恭懿太子**と曰う。

■**[荊州に江陵府]**九月，甲午(30)，南都を荊州に置き，荊州を以て江陵府と為し，仍ほ永平軍團の練兵三千人を置き，以て吳、蜀之冲を扼す，節度使の**呂譔**之請いに従う也。

■**党項****[郭子儀の再登用]**或は上言す、

「天下は未だ平らがず，宜しく**郭子儀**を散地に置くべからず。」

乙未(31)，**子儀**に命じて出でて邠州に鎮ぜしむ。党項は遁げ去る(子儀を畏れる)。戊申(44)，制す、

「**子儀**は諸道の兵を統べ朔方より直ちに范陽を取り，還りて河北を定め，**射生**は英武(前卷至徳二載十月にあり)等の禁軍及び朔方、鄜坊、邠寧、涇原の諸道の蕃、漢の兵を發し(12-336p)共に七萬人，皆な**子儀**の節度を受けしむ。」

制下りて旬日，復た**魚朝恩**の沮む所と為り，事は竟に行われず。(胡三省曰く、郭子儀をして果たして兵を統べて范陽に向かわしめば、則ち史思明は内顧の憂い有り、李光弼は夾攻の勢いを成し、必ず邙山の敗無かりしならん。郭季は功を成せば、則ち又必ず河北の諸師を樹置するの禍無からしならんと)

■冬，十月，丙子(12)，青(當に淄に作るべし)、沂等五州(淄・沂・滄・徳・棣)節度使を置く。

■**党項**十一月，壬辰(28)，涇州は党項を破る。

【劉展の反乱】

■**[劉展は剛強]**御史中丞の**李銑**、宋州刺史の**劉展**(劉殿×)は皆な淮西節度副使を領す。**銑**は貪暴にして不法なり，**展**は剛強にして自ら用い，故に其の上と為る者は多く之を惡む。節度使の**王仲升**は先ず**銑**の罪を奏し而して之を誅す。時に謠言有りて曰く、

「手に金刀を執り東方に起こる。」

仲升は監軍使(唐の中人は出でて方鎮の郡を監し、品秩高き者は監軍使と為し、其の下は監軍と為す)、内左常侍の**邢延恩**をして入りて奏せ使む、

「**展**は倔強にして命を受けず，姓名は謠讖(金刀の謠、劉姓に應ずるをいう)に應じる，請う之を除かん。」

延恩は困りて上に説きて曰く、

「**展**は**李銑**とは一體之人なり，今**銑**は誅せられ，**展**は自ら安ぜず，苟くも之を去らざれば，恐らくは其れ亂を為さん。然るに**展**は方に強兵を握り，宜しく計を以て之を去るべし。請う**展**を江淮の都統に除し，**李恒**(浙東節度と為り、淮南を兼ねること前卷元年にあり)に代わらしめ，其の兵を釋き鎮に赴くを俟ち，中道にして之を執らん，此れ一夫の力なる耳。」

上は之に従い，**展**を以て都統淮南東、江南西、浙西三道節度使と為す。密に舊都統の**李恒**及び淮南東道節度使の**鄧景山**に敕して之を圖らしむ。

■**[邢延恩は劉展の疑いを解く]****延恩**は制書を以て**展**に授け，**展**は之を疑い，曰く、

「**展**は陳留參軍より，數年にして刺史に至る，暴貴と謂う可し矣。江、淮の租賦の出ずる所，今之重任なり，**展**は勲勞無く，又た親賢に非ず，一旦恩命寵擢此くの如きは，讒人の之を間する有るに非ざるを得る乎？」

困りて泣下る。**延恩**は懼れ，曰く、

「公は素より才望有り、主上は江、淮を以て憂と為す、故に不次に公を用いる。公は反って以て疑いを為すは、何ぞ哉？」

展は曰く、

「事は苟くも欺かざれば、印節は先ず得可き乎？」

延恩は曰く、

「可なり。」

乃ち馳せて廣陵に詣り、**峒**と謀り、**峒**の印節を解き以て**展**に授く。**展**は印節を得、乃ち上表して恩を謝し、牒して江、淮の親舊を追い、之を心膂に置き、三道の官屬(宮屬×)は遣使して迎え賀し、圖籍を申べ、道に相い望み、**展**は悉く宋州の兵七千を擧げて廣陵に趣く。

■**[邢延恩と劉展の対立]**延恩は**展**が已に其の情を得るを知り、還りて廣陵に奔り、**李峒**、**鄧景山**と兵を發して之を拒み、檄を州縣に移し、**展**が反するを言う。**展**も亦た檄を移して**峒**が反するを言い、州縣は従う所を知る莫し。**峒**は兵を引いて江を渡り、副使の潤州刺史の**韋儼**、浙西節度使の**侯令儀**と京口に屯し、**鄧景山**は萬人を將いて、徐城(泗州に属す。漢の徐県の地。隋は徐城県を置く。安徽省淮泗道盱眙県、現・淮安市盱眙県)に屯す。**展**は素より威名有り、軍に御すこと嚴整にして、江、淮の人は風を望んで之を畏れる。**展**は倍道して期に先だちて至り、人をして**景山**に問わ使めて曰く、

「吾は詔書を奉じて鎮に赴く、此れ何の兵ぞ也？」

景山は應じず。**展**は人をして(12-337p)陣前に呼ば使めて曰く、

「汝の曹は皆な吾が民也、吾が旗鼓を干す勿れ。」

其の將の**孫待封**、**張法雷**をして之を撃た使め、**景山**の衆は潰え、**延恩**と壽州に奔る。**展**は兵を引いて廣陵に入り、其の將の**屈突孝標**を遣わして兵三千を將いて濠、楚を徇えしめ、**王[口恆]**は兵四千を將いて淮西を略せしむ。

■**[李峒の軍は自壊]****李峒**は北固(北固山は京口に在り。梁の武帝の登る所はこの地)を辟(統は關)きて兵場と為し、木を挿して以て江口を塞ぐ。**展**は白沙(揚州揚子県の白沙鎮。江蘇省淮揚道儀徵県、現・儀徵市)に軍し、疑兵を瓜洲(揚州江都県の南三十里に瓜州鎮に有り、正に京口・北固山に対する、瓜歩山あたり、江蘇省淮揚道江都県、現・南京市六合区瓜埠鎮)に設け、多く火、鼓を張り、將に北固に趣かんとする者の若し、是の如きこと累日なり。**峒**は鋭兵を悉して京口を守り以て之を待つ。**展**は乃ち上流(白沙より渡り、升州の東北九十里にして句容県に至る)より濟り、下蜀(句容県の北、現・鎮江市句容市)を襲う。**峒**の軍は之を聞き、自ら潰え、**峒**は宣城(漢の宛陵県、晋は宣城を置く。隋は陳を平らげて郡を廢し、宛陵を改めて宣城県と為す。宣州を帯びる。鄭昉が峒に代わる)に奔る。

■**[劉展は一勢力を為す]**甲午(30)、**展**は潤州(現・鎮江市潤州区)を陥す。升州(金陵に治す)の軍士萬五千人は**展**に應じんと謀り、金陵城を攻め、克たず而して遁げる。**侯令儀**は懼れ、後事を以て兵馬使の**姜昌群**に授け、城を棄てて走る。**昌群**は其の將の**宗犀**を遣わして**展**に詣りて降る。丙申(32)、**展**は升州を陥し、**宗犀**を以て潤州司馬、丹楊軍使(乾元二年に丹揚軍を潤州に置く)と為す。**昌群**をして升州を領せ使め、従子の**伯瑛**を以て之を佐けしむ。

■**李光弼**は懷州を攻め、百餘日、乃ち之を抜き、**安太清**を生きて擒とす。

■**[史思明勢力の拡大]****史思明**は其の將の**田承嗣**を遣わして兵五千を將いて淮西を徇えしめ、**王同芝**をして兵三千人を將いて陳を徇えしめ、**許敬江**をして二千人を將いて兗鄆を徇えしめ、**恭薛鄂**をして五千人を將いて曹州を徇えしむ。

■**党項****[党項の侵入]**十二月，丙子(12)，党項は美原(咸亨二年に京兆の富平・華原及び同州の蒲城を分けて置く、陝西省関中道富平県の東北六十里、現・渭南市富平県)、華原、同官(本は官の銅官、陝西省関中道同官県、現・銅川市印台区)を寇し、大いに掠め而して去る。

■賊帥の郭暉等は諸羌、胡を引き秦隴防禦使の韋倫を敗り、監軍使を殺す。

■兗鄆節度使(乾元二年に鄆齊兗三州都防禦使を併せて節度使と為す。是の歳齊州を以て青密に隸し、而して兗鄆は徐州を増し領す)の能元皓は史思明の兵を撃ち、之を破る。

■**[李藏用は兵を募りて劉展を拒む]**恒之潤州を去る也、副使の李藏用は恒に謂って曰く、

「人の尊位に處り、人の重祿を食み、難に臨み而して之を逃れるは、忠に非ざる也。數十州之兵食、三江(吳淞江・錢塘江・浦陽江)、五湖之險固を以て、一矢をも發せず而して之を棄てるは、勇に非ざる也。忠と勇とを失えば、何を君(尹×)に事えん！藏用は請う餘兵を収め、力を竭くして以て之を拒まんと。」

恒は乃ち悉く後事を以て藏用に授ける。藏用は散卒を収め、七百人を得、東に蘇州に至りて壯士を募り、二千人を得、柵を立てて以て劉展を拒む。

■**[李恒は洪州に奔る]**展は其の將の傅子昂、宗犀を遣わして宣州を攻め、宣歙節度使(宣歙饒三州を領す巴)の鄭昉之は城を棄てて走り、李恒は洪州に奔る。

■**[李展は支配体制を作る]**李藏用は展の將の張景超、孫待封と郁墅に戦い、兵は敗れ、杭州に奔る。景超は遂に蘇州に據り、待封は進みて湖州(本は漢の烏程県。隋は湖州を置く。大業の初めに州を廢す。唐の武徳四年に復た置く、現・湖州市吳興区)を陷す。展は其の將の許嶧を以て潤州刺史と為し、(12-338p)李可封を常州刺史と為し、楊持璧を蘇州刺史とし、待封は湖州の事を領す。景超は進みて杭州に逼り、藏用は其の將の溫晁をして餘杭(漢の県、杭州に属す。州の西十五里に在り、浙江省錢塘道餘杭県、現・杭州市余杭区)に屯せ使む。展は李晁を以て泗州刺史と為し、宗犀を宣州刺史と為す。

■**[李展勢力拡大]**傅子昂は南陵(漢の春穀県。梁は南陵県及び南陵郡を置く。隋は郡を廢し、県を以て宣州に属す。安徽省蕪湖道南陵県、現・池州市貴池区)に屯し、將に江州を下り、江西(江南西道)を徇えんとす。是に於いて屈突孝標は濠、楚州を陷し、王[口恆]は舒、和、滁、廬等の州を陷し、向かう所摧靡せざるは無し、兵萬人、騎三千を聚め、江、淮の間を横行す。壽州刺史の崔昭は兵を發して之を拒み、是に由りて[口恆]西するを得ず、止めて廬州に屯す。

■**[田神功は李展を破る]**初め、上は平廬都知兵馬使の田神功に命じて所部の精兵五千を將いて任城に屯せしむ。鄧景山は既に敗れ、刑延恩と奏し神功に敕して淮南を救わんと乞い、未だ報じず。景山は人を遣わして之を趣し、且つ淮南の金帛子女を以て賂と為すを許し、神功及び所部は皆な喜び、衆を悉くして南下し、彭城に及び、神功に敕して展を討たしむ。展は之を聞き、始めて懼色有り、廣陵より兵八千を將いて之を拒み、精兵二千を選びて淮を度り、神功を都梁山に撃ち、展は敗れ、走りて天長(天寶元年に江都・六合・高郵を分けて千秋県を置く。七載に天長と改め、揚州に属す、安徽省淮泗道)に至り、五百騎を以て橋に據りて拒み戦い、又た敗れ、展は獨り一騎と亡げて江を渡る。神功は廣陵及び楚州(蓋し先ず入り、廣陵に入る)に入り、大いに掠め、商胡を殺すこと千を以て數え、城中の地穿掘(人の窖藏する所の者を求める)して略ぼ遍ねし。

■**吐蕃**是の歳、吐蕃は廓州を陷す。

令和8年1月26日 翻訳開始 11449文字

令和8年2月16日 翻訳終了 24354文字